本学における創作ダンスの一考察

——創作者と観者の関係——

曾 和 光 代

はじめに

ダンスは創造的な運動であるため、身体活動だけでなく、イメージによって呼び起こされた感情を表現する。そのイメージがはっきりと感覚的にとられられた時に、運転神経を介して動きとなって表われてくる。

このイメージの量は個人の想像的素材の豊さにかかわる。このように、心理面、精神面にもダンスは大きく支配される。

その上、ダンスを創作するにあたって、自己の感情を動きに表わして踊るだけでなく、作品は自己の意志を身体活動によって相手に伝えなくてはならないので、どのように表現すれば自分の意志が伝わるか、観者側の立場に立っても考えて、創作してゆかねばならない。このことから、観者にも想像的素材の豊さが要求され、両者の心情の豊さはお互いにダンスのイメージをつくる。このイメージは同一であることもあれば、互に異ることもある。

ここでは、両者の関係を本学学生の作品を通じて述べてみたい。

I ダンスの形式と内容

創作者（踊り手）と観者との関係をみるため、ダンスの形式と内容について「舞踊学原論」マーガレットN・ドウブラー著、松本千代栄訳に述べられてる考えに添ってのべてみたい。なぜなら、ドウブラー女史のダンスの分類の示し方は大きく、表出の舞踊と描出的舞踊にわけ、この二つがダンスを创作する側にも観る側にも関係し、ダンスを理解する上にも必要なことである。

もちろん彼女が述べているダンスの分類は、芸術的なダンスについて示され
ているのであろうが、本学学生の作品にも当てはめることができる。出き上った作品が絶芸術に属さなくとも、次の段階へ発展してゆける足がかりになるので、初めにドゥブラーフ女史のダンスの分類について、「舞踊学原論」より抜きだして示したい。

１ 表出的舞踊と描写的舞踊

『描写的態度は、知性と判断力に、より直接に訴える方法である』「表出」は、より間接的で、「…についての認識」よりも、「感じられる価値」に関係してくる。舞踊が描写的である度合に比例して、舞踊の意味はただちに把握される。舞踊が表出的である度合に比例して、舞踊の意味は想像的によってよりよく理解されるようになる。この二つの様式はすべての優れた舞踊作品の本質的要素であると考えられるべきである。』「表出的舞踊」とは、ドゥブラーフ女史は「描写的方法には、より明確な、より現実的な要素があるために、あまり舞踊意識のない観客には、この形式で紹介されるのが普通である。」と述べてあり、描写的な「劇場舞踊」については「劇場の観客の娯楽のために計画された舞踊の方法に対して用いられる用語である。人びとは、俳優、音楽家、舞踊家の情緒的経験を相伴いとして劇場へ行く。彼らは楽しみたいと望むとともに、理解し、感動を与えられることを望む。舞踊はあまりにもすみやかに動きすぎるので、一般的な観客はその意味を捉えることができない。観客がより啓蒙されるまでは、舞踊はできるだけ直接的にかつ、ままざまと示されることが重要である。このこと達成するためには、役に立つ道具類と共に、よりリアリスティックな、パントマイム的運動が用いられる。劇場舞踊は、最高の発達した芸術形式の舞踊ではないけれども、それにもかかわらず、それはすぐれた芸術的処理のための媒体であり、また、観客に舞踊鑑賞を教育する重要な関係であり続けるであろう。』と述べており、実際にダンスのおもしろさは、このあたりから入ってゆくと楽しいものである。特に、年少者のダンス指導の場合、描写的方法で、明確で現実的な題材から入ってゆくのが動機づけやすい。色々な道具を使って物語りふうにもってゆくとなお一層の理解を示してくれる。

(44)
さらに、表出的な舞踊に対して用いられる用語に「リサイタル・ダンス」を示しているが、このダンスは、純粋な舞踊で、その運動はメッセージを伝えるために、絵画的、文学的、劇的主題のような外部からの助けに依存しないで、運動そのものから情緒的な力を惹き起こすダンスであるとしている。
実際ダンスの授業で芸術的な作品にまで仕上がるものはないにしても描写的なものから表出的なものへと発展してゆくことをダンスのねらいとしてゆきたいものである。
さらに、ドゥプラー女史は表出的舞踊を「活動的な舞踊」と「気分と感情・情緒の舞踊」の二つの系列に、描写的舞踊を「主体的舞踊」と「性格描写的舞踊」の二つの系列に類別している。
⑤ 表出的舞踊
(1) 活動的な舞踊
活動的な舞踊とは活動に起因する感情を源とする舞踊を意味する。身体的活動と、舞踊に対するインスピレーションとなる感情に導く感情的諸過程を目覚めさせる。このような舞踊は、特定の出来事、描写、人生問題、記憶に関係するものではない。⑥」と述べ、基礎となるものは、個体の表現性と律動的感性であるとしている。
(2) 気分と感情・情緒の舞踊
より複雑な心的状態に発端を持ち、そのために、若干異なった方法で達成されるのである。それらは、経験の感覚的塗面に属する代わりに、第一義的にはその情緒的塗面に属するが、経験の感覚的・知的塗面に深く根を下ろしている。⑥
これら二種のダンスは両方とも喜劇的なものから悲劇的なものにいたるまでなんらかの味わいを持つであろうと述べ、表出的舞踊は叙情詩的精神を帯びているとしている。
⑥ 描写的舞踊
(1) 主題的舞踊
ある特定の状況、または物語に関連する内容にかかわりを持つ舞踊であるとし、
『舞踊運動は、人の想像力をそそり、情緒を惹き起こすところの、ある現実的な人間らしい間心を含む主題に依っている』

パントマイム的舞踊

『純粋舞踊でもなく、厳密にパントマイムでもなく、両方の性質を帯びるような特質に表現運動がはこばれる』と述べられている。

実際、この舞踊は客観的であり、現実的な面をふくんでいるので、観る側にも観る側にも理解しやす

(2) 性格描写的舞踊

『創造的想像力は他の人の経験を自己のものとし、自分自身の観点とは異なった観点に入りこむ。ダンサーは、自己を「他者とする」(others) のである。彼は別の人た運動や感情を演ずるために自分の運動を形象化する。動物を、人間と同様に性格描写のための豊富な主題を示唆する。

描写的舞踊は、いくらか劇的表現を有している。というのは、ここでは望まれる情緒反応を喚起するために描写されている特殊な状況に向って、思考が方向づけられているからである。これに対して、表現的舞踊は、動機を考慮することなく、感情を直接的に表現する。しかしながら、それらは連想を通して、物語や状況を暗示し、したがって、具体的な解釈をもたらすことができるであろう。

以上の分類方法より、初歩的なダンスには描写的舞踊により入り、段階をへて、表現的舞踊に発展してゆくのが普通であろうと思われる。特に、幼児期に行なわれる身体活動は主に描写的方法によるものであり、具体的な、身近にあるものが題材として好まれる。

2 本学学生の創作作品の分類

1990年12月8日（土）に本学記念講堂で行なわれた創作ダンス発表会の作品6点についてのみ順にさぐってゆきたい。

④ 作品の紹介

① 「大きな株」 保育内容・身体表現履修者 作品
小学校一年生国語教科書「かざぐるま」上より
絵本の内容
大きな株をおじいさん、おばあさん、孫、犬、猫、ねずみと力をあわせてぬくという、お話し。
役割：おじいさん、おばあさん、孫、犬、猫、ねずみ、大きな株（数人）。
② 「グリとグラ」 保育内容・身体表現履修者 作品
中川李枝子・大村百合子作
絵本の内容
のねずみのグリとグラは木の実を拾いにいって大きな、たまごをみつけ、そのたまごで大きな、大きなホットケーキを作るというお話し。
役割：グリ、グラ、森の木々、（数人）、森の動物達（数人）。
③ 「子どもの四季」 3回生演習Ⅰ（体育）履修者
表現の内容
四季を通じて、子ども達の遊びをおおってゆく。
役割：秋－トンボとりをする少年（数人）、トンボ（数人）。
冬－雪（全員）少年、たこ、おしくらまんじゅうをする子ども達（数人）。
春－萌芽（全員）鬼遊びをする子供達（全員）。
夏－雨のダンス（数人）。
夏祭り（全員）。
④ 「夢」 4回生演習Ⅱ（体育）履修者
表現の内容
夢の世界を色で繋ぎ観る者も夢の世界へと誘う。色それぞれの感情表現である。
白（無・透明・生命の誕生）
赤（情熱・興奮・躍動）
黄（無邪気・活発・陽気）
緑（新鮮・萌芽・爽快）
青（清涼・冷静・流麗）

(47)
紫（神秘・嫉妬・艶美）
黒（全体をまとめて粋な感じで。）
役割：白と黒、初めと終わりは全員で踊り、赤、黄、緑、青、紫は各一人つつ。
⑥「ある感情」 4回生演習 I（体育）履修者
表現内容
人が生きていく上で様々な感情がその行動を左右する。感情のおもむくままに流されれば、“人”（人間）としての生む方から逃避することになるのではないか。しかし、楽な道をたどれば……。他人にとっては、ある些細な出来事でも、本人にとっては人生の選択ほどの意味を持つ。とまどい、苦悩、葛藤、逃げもせず素直に受けとめ自分の道をみつけ出す。そんな人の心のゆれ動きを表現したい。（創作者の文章内容をそのままに抜いている。）
役割：独り舞
⑥「生れてから」 4回生演習 II（体育）履修者
表現内容
生れてくる喜び、戸惑い、驚き、希望、そして生きてゆくために燃え、次への生命へとつなげてゆく。
役割：独り舞
以上、絵本より 2点、身近な題材より 1点、感情表現 3点である。
⑤作品の形式と内容
ダנסの授業の際、具体的な題材から入り抽象的なものへと移っているので、段階をへて述べてゆく。
（1）描写的舞踊
作品の①「大きな株」 ②「グリとグラ」という、物語に添って振り付けが考えてあり、色々な動物の役を演じなくてはならない。動きは時にバントマイム的に株をぬく動作、ホットケーキを作る動作がでてくる。動物の動きは模倣的に表現してゆく。各動物は個人の表現力にかかっており、その動物になりきるのである。その上、観者にもわかりやすいように、動物の耳やしっぽ等をつけて表現するので観者にも理解しやすい。これら二つの作品は年少者にも
理解しやすいように、振り付けを考えてもらった。ダンス的というより劇的要素が多く、身体で色々な事を表現してゆく初期段階と考える。

これらの作品は描写的舞踊に入る。主題的要素と性格描写的要素の二つを含めた形になるのではないかと思われる。

作品③「子どもの四季」

この作品は主題を決めて作品の創作にあたった。子どもの頃の遊びより四季を伝えようとする作品であり、遊びのイメージを皆んなで広げてゆく。その背景にある物。身近な経験の中から題材をえらび表現してゆく。トンボとり、おしくらまんじゅう、たこあげ、鬼遊び、祭り、トンボ、ドングリ、雪、萌芽、雨、みこし、とイメージをひらってゆき、秋より初まり順に季節はおくられてゆく。幼い頃の思い出にひたる人間らしい一コマである。舞台だけでなく、観客席も利用して遊びは広がってゆく空間の使い方。小道具の利用、かけ声、衣裳については祭りの表現の時は、ハッピー、ゆかたを着たが、その他の表現は、黒のタイツ、白のTシャツ、ショートパンツを着用し衣裳は普段に近い状態である。

この作品も分類すれば描写的舞踊の内に入り、その中の主題的舞踊の中に入るであろう。

(2) 表出的舞踊

作品④「夢」

この作品は白より初まり群踊で皆んなを夢の世界へさそう。赤、黄、緑、青、紫でそれぞれ独り舞いとなり、赤は激しく情熱的、黄はかわいらしく、ほのかな感じ、緑は新鮮な感じ、青はさわやかな感じ、紫は神秘性と艶美さのある感じで創作にあたっている。最後の黒で夢のまとめをし、枠に終ろうというのがこの作品である。衣裳そのものではなく、それぞれ、表現する色の衣裳をつけていので観者からもイメージはとらえやすいように、もっていている。

分類としては表出的舞踊に含まれる。その中の「気分と感情、情緒の舞踊」に入るもの。人間の感情を色にかえて表現している。観者には色の世界と音楽の世界も楽しんできたこうという願いもあって、感情表現ではあるが描写的部

(49)
も少し含まれている。

作品⑤「ある感情」
この作品は人間の複雑な心理状態を創作者自身が動ける範囲内で創り上げている。効果音も、動きでその感情がわかるように、もってゆくため、打楽器（リズムダイコ）を用いている。衣裳もあまりこらせず、色も地味なグレーニ黒のタイツである。動きそのもので、自己の意志を伝えてゆこうという作品である。

分類すれば表出的舞踊の中の「気分と感情・情緒の舞踊」に入り特に感情を身体で表現していく作品である。

作品⑥「生れてから」
この作品も表出的舞踊の中に入る。一つの生命がこの世に生れ、その喜び、戸惑い、驚き、などを身体で表現し、次代へ生きてゆく希望へとつなげてゆこうとする、人間の情緒的な面をとらえて観者に伝えようとする作品である。

これも「気分と感情・情緒の舞踊」に入る。

Ⅱ ダンスにおける創作者と観者の関係

１ 観 視
音楽、絵画、舞踊、その他色々な芸術作品を鑑賞するさい、前もって予備知識があればその創造者の意図した目的に気づき、創作者と共にその気分に浸る事ができるかもしれませんが、普通、美をみつけ、感動するのは自己の能力の限界内でのみ、それを見いだし。その他物事についての価値感も、その対象となるものに価値があると認めるより、個人がそれらを体験した時に価値があると認める、そのものが、美しかったり、力強く感動的であったり、手に入れてみたいったり、するのであって、たまたま、そのものが、個人の欲求と必要条件に合致したということである。

ダンスを創る際にも、個人の持っている人生経験や体験した内から、その個人の情緒、感情の興奮、緊張などとなって表現される。ダンスの場合、こ
の心理的な面が主要をしめているので、個人の能力の限界内でダンスは創り上げられてゆく。もちろん、助言する事により、表現能力は増し、表現に対する努力によって、個人の感情や思想は高まってゆく。

動きのイメージがわくと、それにしたがって現実に動ける運動へとあてはめてゆくが、個人のイメージ構成が自由で自然なものでなければ、自由なそして自然な動きへとあてはめずけない。動きを自由で自然なものへとあてはめたためには、まず心の自由からはじまる。心にかたよりがあるならば、その動き、運動そのものが、ぎこちないものになってしまう。特に、ダンスの場合、動きそのものが個人の感情に大きく影響していることをでき上った作品を観て感じる。

もちろん、これらの事は観る側にも言えることである。観る者が、自由な心の持ち主であればでき上った作品を色々な方向から理解し、楽しみ、その人自身、創作者と共に作品を味わう事も可能となるであろう。観る側も個人のもっている能力の限界内で作品を観照することとなるわけである。しかし、創って踊る者、その作品も観る者も共に人間である以上、両者の意志とか、感情が加わってくる。動きが自然で、美しいものでなければならない、観るものの美感をともなわない。

実際にダンスを創作してゆく過程において、つねに観者の立場から、その作品を客観的にみて、どうであろうかと考えながら創り上げてゆく行為も必要なので、創作と観照とは同時に進行してゆく活動である。ゆえに、創作者と観者が同一の作品の両側にあって、観者はその作品から、ちがったイメージで感情をよびおこし、現実生活からはなれ自由な意志行為で想像の世界へひたるのではないか、この気分に浸れない。しかし、観者もその作品が何を訴えているかを見落としてはならない。

2 本学学生の創作者と観者の関係

創作ダンスの発表会終了後、又、その後の反省会で持たれた作品についての感想をまとめてゆくと。創作者と観者との間に大きな意志のくいちがいは感じ
られたなかった。

しかし、描写的舞踊の作品の方が理解しやすく。「劇的でおもしろかった。」「自分もその中にいるようである。」「かわらしい。」「楽しそうに踊っていた。」「絵本がダンスになるのなら私もやってみたい。」「私もできそう。」「別に高度な技術もいらないので一度やってみたい。」等、観者からの感想であった。気楽に観れた作品であったようだ。

「グリとグラ」「大きな株」については、物語に添って振り付けてあるので内容を楽しみながら感受してゆけたのではないか。創作者の方もどれだけ身体で物語の内容を表現し得たか問題であるが、衣裳、小道具、効果音も含めて創作者達の意図が秘められており、その意図は観者側にも理解したのである。

「子どもの四季」についても、人気が集まり構成や振り付けを楽しんでいた。

これらの作品については、創作者側の意図が観者側に感受されたことになり、観者の舞踊的、芸術的教養や感性の程度が、これらの作品と一致したことになる。

実際、舞踊を理解するのはむつかしいものがあり、描写的に表現されたもののは舞踊知識がなくても観ていて楽しい。

さて、表現的作品についてはどうであろうか。これらの作品については、何か良く理解はできないが、「動きだけで、感情を表現してみたい。」「抽象的なものもやってみたい。」「見ていて、ぞくぞくする。」「何かシーンと来る。」等、感じ方も人それぞれの異ったとらえ方をしているのがおもしろい。これらの作品こそ、観る者の感性をとらわれ作品である。

「夢」については、創作者達の意図した通りに衣裳効果があり、観る者を楽しませていたようであった。色それぞれの衣裳を着ているので色のイメージを観る者に踊る前から与えている。この効果は大きく全体に踊り手の技術不足をおさないってくれた。観る側にも、「衣裳が、踊りに合っていて、とても美しかった。」「衣裳がきれいながら観ていて楽しい。」と答えが返って来ている。効果音はつなぎが悪く、聞きぐるしい点があった。しかし、創作者達の意図した衣裳効果をねらった表現は、観者達に伝わったようである。
「ある感情」については、感情表現なので、人それぞれ感じ方がちがうようである。動きによる自己の意図の伝え方なので、その動きは必ずしも観者に伝わるとは限らない。しかし、この作品を観て「空気の重さを感じさせる。」「衣裳もしっとりと無添加で動きをとまらせない良さがある。」「個性的である。」「ある動きで空気が止る。観客の息もハッとする。」「観ていてゾクゾクする。」「ジーンとくる。」等の感想が返ってきており、抽象的にえがかれた作品に対して、理解しにくいが、感じるとものがあるらしく、この感情が大切であり、より一層、自己の感性を高める機会を持ってほしいものである。

「生まれてから」については、衣裳全体は白ぼく、目立つ色ではない。動きそのもので、自己の意図を観者に伝えねばならない。この作品も喜び、戸惑い、驚き等の感情表現があり、効果音もトライアングルだけなので、観者側に向理解できたか、意図が伝わっているか、疑問であるが、「動きがきれい。」「振り付けが良い。」「効果音と衣裳、演技が合っている。」等全体的に観た感じをのべている。少し、創作者側の自己の意図を伝える動きの弱さがあったように感じられる。

全体的にみて、創作者側からも観者側からも、描写的舞踊が入ってゆきよいと考えており、だからといって、表現的舞踊のダンスを否定しているわけではない。自己の思いを動きだけで表現する表現的舞踊にも挑戦したいと思っている。

これらの創作ダンスの作品は、親和女子大学「児童教育学研究」第8号1989年でものべたが、創作活動に参加することによって自己の運動する楽しみ、喜びが高まってくれれば良いのであって、純芸術的であることをこの段階では主張しない。しかし、これをきっかけに、より高度な段階へと進むように発展していってくれればありがたいことである。観る側も、創る側も個人的な経験をするわけであるが、創る側は観者が作品について、どう感じてくれているか。観る側も満足のゆく作品をみたい。興奮させてくれる感情をあじわいたい。等の相互の関係を考えないわけにはゆかず、相互に納得ゆくもの、承認を求めるものであって、創作者も観者もお互いに影響を受けずにはおれない。
おわりに

ダンスは誰れにても踊れるし、観ることもできる。芸術的な分野に至るには踊る方も観る方にも個人の審美力の豊さが必要である。しかし、楽しんだり、欲すること、喜びと満足を感じることなどはまったく人間が持っている生れた能力である。これらは経験を積むにつれて、本能的な初歩的な水準から、理解と知性の水準までに引き上げられる。水準を引き上げることによって、踊る者にとっては動きによる表現の豊さが増し、観者にとってはその演技を理解することができるようになるのでより一層それらを楽しむことができる。

学校におけるダンスの授業では、皆んなと楽しくダンス踊ったり、協力して作品を創り上げる。そして自ら身体を動かすことは楽しめるのであるが、常に自分の経験した事より自由な発想が展開してゆけるようにより良い指導を受け、最も適当な身体表現へと通ってゆき、ダンスの質を高めることも考えるべきである。質を高めるためには普段から自身自分の審美力を発達させておかなくてはならない。自分自身の感情と経験によって創造する能力を持ってほしい。豊な感情を育てるためにも何事にも感心を持ってほしい。

『感情を通じてわれわれは、われわれの世界の印象のみならず、われわれ自身の印象をも受けとる。知性によって、われわれは理解し、意味を理解することにいたる。想像力によって、われわれは共感を結合する。過去の経験から、われわれは、新しい心像を創造する。そして意志とエネルギーをもって、それらを実行に移し、生みだしのである。これこそ、創造的行為である。』

感情、知性、想像力、過去の経験、意志、これらの事は、ダンスに限らず、人間が生活してゆくために必要なことだからであると思う。日常よく使われる言葉に「ここ踊って喜ぶ」という言葉も踊るという事は人間生活の中に欠くことのできない感情表現である。

誰もが本質的に持っている動きをよりダンスに近づけてゆくのは教育を通じて、知識を高め、理解し、訓練しなくてはならない。指導者側としてはいかに本質的な感情をより高度なものへと導いてゆくかが問われる。
注釈
※1）Margaret N. H’ Doubler 1889年4月 Kansas 州 Beloit に生れる。
Wisconsin 大学準教授
※2）松本千代栄
お茶の水女子大学教授
日本女子体育連盟理事長

引用文献

1）「舞蹈学原論」一創造的芸術経験一
著者：マーガレット N. ドゥブラー
訳者：松本千代栄
出版社：大修館書店
出版年：1974年，125ページ

2） 同上 125ページ
3） 同上 126ページ
4） 同上 126ページ
5） 同上 127ページ
6） 同上 128ページ
7） 同上 130ページ
8） 同上 131ページ
9） 同上 134ページ

【参考文献】

1. 書名　「舞蹈学原論」
著者名　マーガレット N. ドゥブラー
訳者　松本千代栄
出版社　大修館書店
出版年　1974年

2. 書名　「ダンス学習法」
著者名　ルース・マレイ著
訳者　松本千代栄・佐藤康子
出版社　大修館書店
出版年　1974年

（55）
3. 書名 「舞踊創作の理論と実際」
著者名 松井三雄校閲
渡辺江津
出版社 明治図書刊
出版年 1964年

4. 書名 雑誌「体育の科学」11-Vol. 40
★ムーブメント・エデュケーション
運動発達へのアプローチ
小林 芳文 著
出版社 杏林書院
出版年 1990年